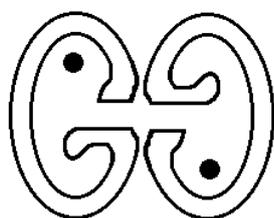


# 日本双生児研究学会ニュースレター

《第70号》

Newsletter of Japan Society for Twin Studies

2021年7月発行



## 目次

・日本双生児研究学会 第35回学術講演会 報告	2
・第7回奨励賞受賞講演報告 「パーソナリティ特性と精神病理的な傾向の行動遺伝学」 高橋 雄介(京都大学 大学院教育学研究科)	4
・日本双生児研究学会 第36回学術講演会のご案内	6
・総会・幹事会報告	11
・日本双生児研究学会ジャーナルの創設について	14
・2021年度日本双生児研究学会奨励賞受賞候補者推薦方法について	15
・会員用メーリングリスト運用のご案内	16
 編集後記	 16

### 会員募集のお知らせ

入会を希望される方は郵便振替用紙に口座番号(00910-2-253840)、加入者名(日本双生児研究学会)をご記入の上、年会費(3,000円)をご送金下さい。また、通信欄に所属・所属の住所・電話番号・FAX番号・E-mail等をお書き添え下さい。

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-7 大阪大学大学院医学系研究科

附属ツインリサーチセンター内 日本双生児研究学会事務局(渡邊幹夫)



## ＜日本双生児研究学会第 35 回学術講演会報告＞

大会委員長 慶應義塾大学文学部 安藤寿康

未曾有のコロナ禍の中での、初めてのオンライン学会だった。振り返ってみると、前回の第 34 回大会はコロナ襲来の直前で、まさかこのような世界になるとは想像できない平時に行うことができた。金沢城のほとりの歴史的な建物の中でリアルに学会を開催できたのが、いまや夢のようである。コロナ禍の厳しさがその本領を表してきた夏から秋にかけて、多くの学会は手探りの中でさまざまな形式でのオンライン学会を試み始めていたが、不慣れな Webinar に戸惑う人もまだ多く、大会開催を断念した学会も少なくなかった。その意味では、1 月という学会としてはやや季節はずれの時期に学術講演会を開催していたことは、幸いであったといえるだろう。このころには多くの人たちが zoom の使い方にも慣れ、はじめはどうなるかと心配していたこのたびの大会は、みなさまのご協力のおかげで、順調に、つつがなく、執り行うことができた。遅ればせながらも、ここにお礼を申し上げます。

「順調に、つつがなく」とひとことで申し上げたが、実のところそれは結果論で、この学術講演会を引き受けることを決めた昨年の学術講演会の幹事会のときから、会が終了し、その動画の配信の手続きが終わるまで、意思決定せねばならない分かれ道がいくつもあり、ささやかながらも「それなり」の経験をさせていただいたと思う。

そもそも学術講演会の 3 ラウンド目を引き受けることになるとは当初予想していなかった。はじめは慶應義塾ふたご行動発達研究センターで活躍してくれていた鈴木国威君が晴れて大阪で独り立ちしてくれたおかげで、そちらで引き受けてもらうことになっていた(なにせ当番校持ち回り制を続ける本学会は、新たな大学に赴任をしてくれた学会員は格好の当番校ターゲットになるのである)。これで一安心と思っていたところ、その鈴木君が別の大学に移籍することになり、それ自体は喜ばしいことだが、さすがに新任いきなり学会の開催をお願いするわけにはいかず、それならば慶應で引き受けさせていただきますということになったわけだ。すでに石川で志村恵現学会長と故大木秀一先生のもとで計 4 回、大阪大学で 3 回開催していることもあり、われわれも栄誉の 3 ラウンド目開催校と相成った次第である。

コロナの収束が見込めなさそうな機運をみなを感じ始めた昨年の夏前の幹事会で、オンライン開催で実施することはほぼ決まった。しかしリアルタイムで行うか、あらかじめ作成されたポスターや録画の配信で行うか、そのハイブリッドにするか、配信システムをどのサービスによるか、運営のサポート体制をどうするかなど、解決すべき課題はさまざまに出てくる。特に秋になると、自分が関わる国内外の学会や研究会でも、それぞれに工夫されたオンライン学会を経験する機会が増え、なかにはかなり手の込んだシステムで、オンサイトのリアル学会よりもはるかに充実した学術交流をなしとげているケースなどもあり、上を見ればきりがなし(下をみてもきりがなしののだが)と思われされる中、身の丈にあった形ということで、今回のように Zoom で大会委員長がホストとなり、もっぱら単線で発表をしていただくという形式となった。サポートとして、今回奨励賞を受賞した京都大学の高橋雄介君に、進行をみとどけ、ラインで随時情報交換し、録画も行ってもらった。奨励賞受賞者を裏方でこき使うのも前代未聞であろう。

学術講演会は2021年1月23日(土)、朝9時半から開始され、口頭発表が全12演題、加えて高橋君の奨励賞授賞記念講演と、今回の学会のために特別に企画した学会アンケート「新型コロナ禍のふたご/みつご子育て状況に関する調査」の報告シンポジウムを実施し、その間に会員総会と、最後に来年度当番校である岐阜聖徳学園大学の松葉敬文先生の挨拶をもって午後5時に終了した。その詳細は公開されたプログラムでご覧いただきたい。また、アンケート調査の結果報告は改めて本ニューズレターその他の媒体で公表してゆく予定である。

確かにオンラインのリアル学会特有の空気感、時間の使い方、なにより実体をともなったリアルな人間を目の前にしての交流(こういう表現をわざわざしなければならない事態がいかに異常なことか)ができない学会は、とりわけ懇親会のような自由な場をもつこともできず、不完全燃焼の気持ちを持たれた方もいらっしゃると思う。しかしいつもよりはるかに見やすいスライドを自分の机の上で見ながら、一人ひとりの発表にこれだけ集中して、ひざを崩しながらでも視聴できる環境は、まんざらではなかったのではないか。少なくとも個人的にはオンライン学会やオンライン研究会は快適である。この新たな試練は学会のあり方もより生産的な形に改変させるきっかけとなるに違いない。

### 学会ホームページのご案内

学会ホームページの URL は、<https://jsts.jp.net/> です。

学会ホームページの QR コードもご利用ください。➡



## <第7回奨励賞受賞講演報告(第35回学術講演会にて)>

### 「パーソナリティ特性と精神病理的な傾向の行動遺伝学」

高橋 雄介(京都大学 大学院教育学研究科)

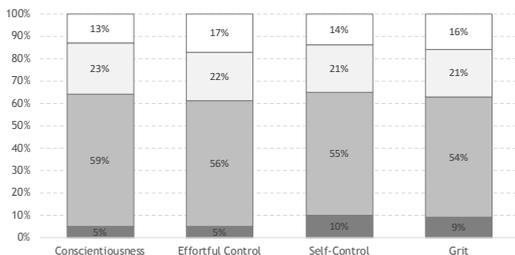
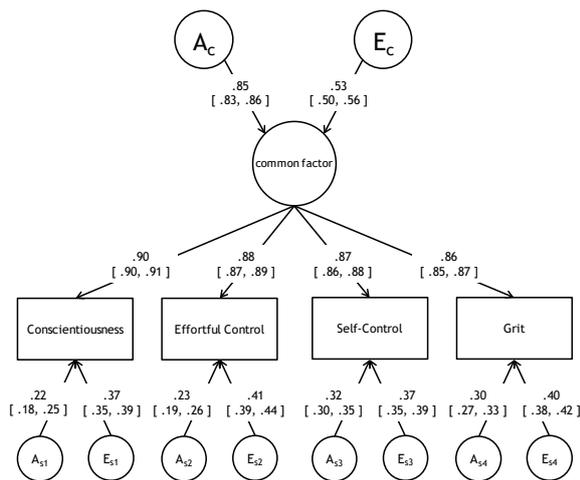
この度は、奨励賞受賞の荣誉にあずかり、大変光栄に存じます。これまでに私が個人的にそして研究グループとして関わってきたふたごの研究協力者の皆様、慶應義塾大学・大阪大学・お茶の水女子大学の双生児研究プロジェクトに関係していらっしゃるすべて先生方、その中でもとりわけ慶應義塾大学の安藤寿康先生と名古屋大学の山形伸二先生に深く感謝を申し上げます。これを励みに、なお一層の努力を重ね、基礎研究の知見の蓄積に精進して参ります。

情勢に鑑み、初のオンライン開催となりました第35回学術講演会にて、私たちがこれまでに取り組んで参りましたパーソナリティ特性と精神病理的な傾向に関する行動遺伝学研究について紹介を行う機会を頂戴いたしました。ここでは紙面の都合上、学会当日に報告申し上げたいいくつかの研究のうち以下の3つに絞ってご紹介したいと思います。

#### 精神病理的な傾向の構造行動遺伝学

行動遺伝学とは、(ここでわざわざ紙面を割いて説明申し上げることがやや憚られました)とりわけふたごの方々を対象とした調査・観察研究を行い(親子や親類など家系に拡張されることもあります)、その表現型(調査や観察の結果、数値や言語の情報として私たちの目で見えて確認可能なデータ)から遺伝と環境の影響を切り分けて考えることの出来る唯一無二の統計学的方法論です。すなわち、ここでは表現型分散に対して遺伝の影響がどの程度、環境の影響がどの程度ということが興味・関心の中心に置かれています。しかしながら翻ってそういった特徴があるということは、表現型のみからだけでは読み解くことのできない、構成概念の「構造」についても言及することが可能ということにほかなりません。私はこれを取りわけ「構造」行動遺伝学と呼称しています。

第一にご紹介した研究は抑うつ的な傾向の個人差に関する研究でした(Takahashi et al., 2020)。先行研究の多くは、質問紙の合計得点を用いてその個人がどの程度抑うつ的な症状を呈しているの



□ Non-shared environmental effects via unique factors  
 □ Non-shared environmental effects via a latent common factor  
 ■ Additive genetic effects via a latent common factor  
 ■ Additive genetic effects via unique factors

かを測定しますが、抑うつ症状にはいくつかの側面があることが報告されてきました。具体的には、認知的な側面、情動的な側面、身体的な側面の3つであり、確かに質問紙尺度においてもこれら3つの側面に関する項目が並んでいます。本研究では、抑うつ症状の3側面と全体的な傾向はどのような遺伝・環境構造を成すのかを明らかにするために、双因子モデル(bi-factor model)を適用することによって、全体と部分それぞれの症状の特徴を同時に描き出すことを目標としました。その結果、抑うつ症状全体の合計得点には先行研究通りに約4割の遺伝的な影響が確認されたのと同時に、情動的な側面にはその全体因子では説明されない遺伝の影響が残存することやそれぞれの側面には非共有環境の影響が相当程度大きいことが明らかとなりました。

#### パーソナリティ特性の構造行動遺伝学

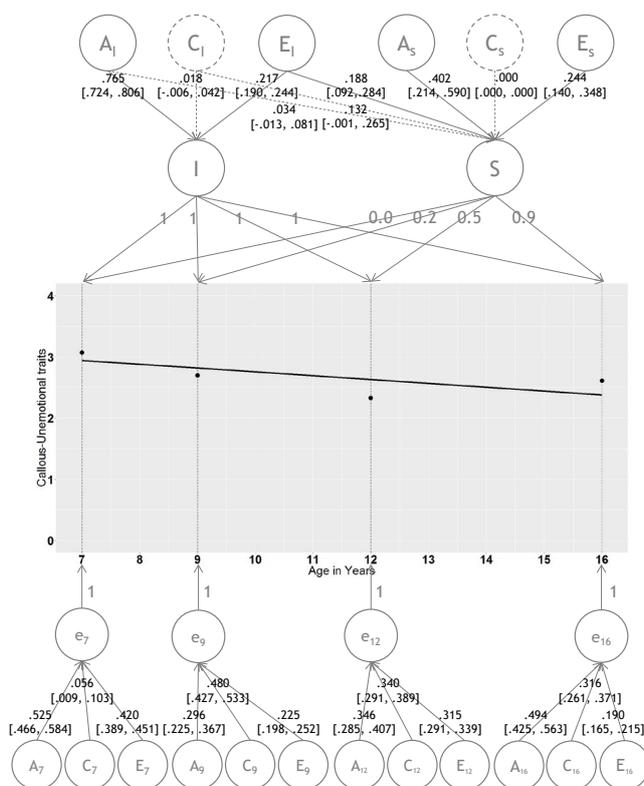
次に紹介したのは、パーソナリティ特性に関する「構造」行動遺伝学です(Takahashi, Zheng, et al., 2021)。やり抜く力(grit)をはじめとする社会情動的スキル(非認知能力)という言葉に耳にする機会が増え、学校現場においてもこの語が

浸透しつつあります。しかし、このやり抜く力という語は彗星のごとく突如として登場したわけではありません。心理学においてはこれに類似する概念がこれまでも数多く存在していました（本来であれば、“数多く”存在してよいものもありません）。本研究では、心理学の諸分野において用いられてきたこれに類する4つの構成概念、具体的には、勤勉性(conscientiousness)・エフォートフルコントロール(effortful control)・セルフコントロール(self-control)・やり抜く力の遺伝・環境構造を分析し、いずれかの構成概念には遺伝的もしくは環境的に特異的な特徴はあるのかどうかを検討しました。この主たる目的は、やり抜く力が遺伝的もしくは環境的になんらかの区別的な特徴を有しているのかどうかの確認でした。本研究の結果、これら4つの構成概念には共通経路モデル(common pathway model)の当てはまりが最もよく、いずれの構成概念も共通因子によって説明される分散がほとんどであり、ラベルの付け替えが起こっている可能性が示唆されました。すなわち、やり抜く力は特段新しい概念ではなく、これまでに研究されたものの焼き直しにすぎないことが行動遺伝学的研究の見地からも明らかとなりました。

### パーソナリティ特性と精神病理的傾向の発達行動遺伝学

報告の最後に紹介したのは、精神病理的な傾向に密接な関連を有するパーソナリティ特性に関する縦断研究です(Takahashi, Pease, et al., 2021)。縦断研究とは、同一個人に対して繰り返し調査を重ね、その発達の動態を明らかにするものであり、この研究は行動遺伝学と発達心理学の合わせ技として“発達”行動遺伝学と呼称可能だと思います。

共感の裏返しとしての冷酷性/無感情性(callous-unemotional traits)は、その後の反社会的な行為の生起やサイコパシー傾向の高さに結び付くことが繰り返し報告されてきました。今回は、英国の有する大規模縦断調査のひとつである TEDS (Twins Early Development Study)のデータを分析する機会を得ました。7・9・12・16歳の4時点において母親が評定した冷酷性/無感情性の得点を成長モデルを用いて分析し、そこで得られた切片(初期値; Intercept [I])と傾き(変化; Slope [S])の分散を行動遺伝解析しました。その結果、切片には大きな遺伝的な影響が確認された一方で、傾きのほうには相対的に弱い遺伝的な影響が確認され、また、それらの遺伝的な影響の間には相関が無いことが明らかとなりました。これは、冷酷性/無感情性の安定性と変容性には異なる遺伝子セットが影響を与えることを示唆しています。また、前述の通り、冷酷性/無感情性の個人差には無視できない遺伝的な影響があると同時に、その発達には環境の影響が重要であり、それらが発達を通じて変化することはそれぞれの年齢時点において適切な介入やサポートの方策も可変的である必要性が示唆されました。



Takahashi, Y., Pease, C. R., Pingault, J.-B., & Viding, E. (2021). Genetic and environmental influences on the developmental trajectory of callous - unemotional traits from childhood to adolescence. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 62(4), 414-423. <https://doi.org/10.1111/jcpp.13259>

Takahashi, Y., Zheng, A., Yamagata, S., & Ando, J. (2021). Genetic and environmental architecture of conscientiousness in adolescence. *Scientific Reports*, 11, 3205. <https://doi.org/10.1038/s41598-021-82781-5>

Takahashi, Y., Pingault, J.-B., Yamagata, S., & Ando, J. (2020). Phenotypic and aetiological architecture of depressive symptoms in a Japanese twin sample. *Psychological Medicine*, 50(8), 1381-1389. <https://doi.org/10.1017/S0033291719001326>

## ＜日本双生児研究学会 第36回学術講演会のご案内＞

新型コロナウイルス感染症のまん延が長期化する中、研究・教育・診療の現場や、地域のネットワークにおいて「新しい日常」が求められ、会員の皆様におかれましても対応に神経を使われる日々を過ごされていることと存じます。

新型コロナウイルスの感染状況は未だ予断を許さぬ状況ではありますが、ワクチンの接種など諸対策も講じられつつあります。本学会においても政府・自治体・研究機関の指針に従って対策を講じつつ、**第36回学術講演会は、ハイフレックス型（対面・オンライン併用）で実施**したいと予定しております。オンライン参加の形式につきましては、昨年度と同じく基本的にZoomによる口頭発表を予定しています。今年度はハイフレックス型のメリットを生かし、海外の研究者や多胎育児支援者にもご参加頂けるよう、大会準備委員会において情宣と周知に努めております。現時点では、カリフォルニア大学フラートン校のNancy Segal博士をはじめ、何人かの海外研究者が参加される予定です。

つきましては以下のように、開催日時と演題申し込みに関する情報を中心にお知らせ申し上げ、最終的な開催方法（対面会議を実施するか否か）については、11月末までに決定し、演題申し込みをされた方に直接メールでお知らせすると共に、次号のニューズレター、ならびに学会ホームページとメーリングリストにて会員の方々にお知らせいたします。発表形式に関して、なにかご要望やお尋ねがありましたら、大会長までメール(takafumimatsuba@gmail.com)でお問い合わせください。

新型コロナウイルス感染症の状況により開催形式等が変更となる可能性もございますが、なにとぞご理解とご協力のほど、お願い申し上げます。

### 1. 日程、開催方法、大会長、事務局

- 1) テーマ Twins in the New Normal (ニューノーマルな社会と双子)
- 2) 日程 2022年1月22日(土) 10時00分～18時00分(予定)
- 3) 会場 ウィンクあいち(愛知県産業労働センター) 13階 1301・1302号室
- 4) 開催方法 対面・オンライン併用のハイフレックス形式  
※今次大会は演題報告の形式・セッションの種別が複数ございます。  
詳細は演題申込の方法をご確認ください。
- 5) 大会長 松葉敬文(岐阜聖徳学園大学)
- 6) 事務局 同(連絡先 [takafumimatsuba@gmail.com](mailto:takafumimatsuba@gmail.com))

### 【会場】

ウィンクあいち(愛知県産業労働センター)  
〒450-0002 愛知県名古屋市中村区名駅4丁目4-38

◎JR名古屋駅より徒歩5分、新幹線口より徒歩9分です。名古屋駅から地上・地下でのアクセスルートについては会場HPをご参照ください。



【アクセスマップ QR コード】



## 2. 参加資格および参加費

1) 日本双生児研究学会会員の他、非会員、学生も参加できます。

2) 参加費

大会会場に来場される会員・一般の方 3,000 円

大会会場に来場される多胎家庭の方 500 円 (資料代として)

大会会場に来場される学生・院生の方 無料 (学生証をご呈示ください。)

オンラインで参加される方 3,000 円 (参加者の立場によらず通信運営費として)

※オンライン参加の参加費支払い方法等の詳細については決まり次第お知らせします。

## 3. 演題申込の方法と抄録集掲載原稿の送付

今次大会は報告形式が対面・オンライン併用であることその他、幹事会の了承を得て査読付きセッションを設けています。演題のお申込みにあたっては、下記の大会開催方法にご留意の上、ご希望の発表方法・セッション種別についても事務局にお知らせください。

1) 大会開催方法

a) 発表方法

①対面、②Zoom システムによるリアルタイムの口頭発表、③録画放送、の三つの形式から、いずれかの演題発表方法をご選択ください。ただし日本国内に在住する演題申込者の発表方法は、特別な事情が無い限り①か②のどちらかをお選びください (どうしても③をご希望される場合は事務局にご相談ください)。また③の録画放送の場合でも、質疑応答はリアルタイムでのご登壇をお願い申し上げます。

b) 報告セッションの種別 (三種別)

①査読付きセッション：事前の査読を通過した報告によるセッション

②一般セッション：無査読の報告 (従来の通常セッション)

③教育セッション：特に学生や多胎家庭の参加者に向けた教育的内容の報告

## 2) 演題申込

### a) 演題の種別

- ① 査読付きセッション：概略付き論文(full paper)の送付をもって参加申込とします。
- ② 一般セッション：抄録の送付をもって参加申し込みとします。
- ③ 教育セッション：原則として、報告希望を受け付けておりません。ただし、一般セッションにお申し込みがあった報告のなかから、教育セッションでのご報告に、変更をお願いさせて頂く場合があります。

### b) 査読セッションについて

査読セッションにご送付いただきました原稿は、原則として概略のみを大会抄録集に掲載させて頂きます。査読を通過しなかった場合は、一般セッションにてご報告を頂くか（原稿は抄録形式にご修正をお願いします）、報告を取下げるかをお選びください。

日本双生児研究学会では、新たに学術誌を創刊することを検討しています。演題申込で査読セッションにお送りいただいた論文を、創刊予定の学術誌に投稿するか否かについて、演題申し込み時に併せてご連絡ください。学術誌への掲載可否については、演題申込時の査読とは別に、新規に査読が行われます。大会後に修正論文をご投稿頂くことや、（抄録集に論文掲載を希望された場合は別として）別の学術誌にご投稿されることも可能です。

## 3) 原稿の送付

論文・抄録は、下記の要領で作成した word 文書を”JSTS36\_あなたの姓名.doc”（例:”JSTS36\_takafumimatsuba.doc”; 件名も同様）として tmatsuba@gifu.shotoku.ac.jp に送付してください(事務局の問い合わせ先アドレスとは異なります)。

## 4) 演題募集受付期間

2021年9月20日(月)～11月30日(火) 21時必着

## 4. 抄録集掲載原稿（抄録・フルペーパー・報告要旨）の作成

### a) 抄録集への掲載

抄録集およびプログラムは電子的に作成し、webを通じて配信する予定です。査読セッションにお申し込み頂いた論文は、原則として概略のみを掲載します。論文自体の掲載をご希望される場合は、大会事務局にご相談ください。

### b) 原稿書式の種別

査読セッションに英語論文で演題申し込みをされる場合、体裁が抄録と異なるためご注意ください。

### 【抄録原稿（一般セッション）】

- 1) 原則として抄録原稿は word による文章ファイルとします(編集する可能性がありますので pdf ではなく word 文書をお願いします)。但し、特別に理由がある場合、図表等は 1 点までとしますが、その際には応分のスペースを文字数から差し引きしてください。不明な点は大会事務局に相談してください。

- 2) 本文の文字サイズは 10.5 ポイントとし、和文フォントは明朝体で全角、アラビア数字は半角、

英文フォントは **Times New Roman** としてください。

- 3) 表題の文字サイズは 14 ポイントとし、簡潔明瞭に抄録内容を表すものとします。
- 4) 発表者名は 10.5 ポイント、所属施設名、共同研究者名の文字サイズは 9 ポイントとし、正確に表記してください。
- 5) 抄録原稿は、下記の作成例を参考に A4 判の用紙 1 枚に簡潔に記述してください。科学論文の場合は、Ⅰ目的・Ⅱ方法・Ⅲ結果・Ⅳ考察・Ⅴ結論別にまとめてください。ただし、Ⅰ～Ⅴのような項目分けが難しければ、それ以外でも可。カラー印刷は不可とします。
- 6) 原稿には、上 20mm、下 20 mm、左右 20mm の余白をとってください。
- 7) 抄録原稿は、表題・発表者名・共同研究者名・所属施設名を記入してください。

#### 【論文（査読付きセッション）】

- 1) 日本語論文の場合、原稿は上記の抄録に準じた書式の、word ファイルとします。
- 2) 本文とは別に、概略（abstract）を 800 文字未満でお付けください。
- 3) 本文において、文字数・図表等に関する制限はありません。
- 4) 英語論文の場合、Twin Research and Human Genetics に準じた書式でご提出ください。
- 5) 抄録集には原則として概略（abstract）のみを掲載します。

#### 【報告要旨（教育セッション）】

- 1) 教育セッションのご報告者には、事務局から書式についてご依頼申し上げます。  
※原則として、抄録に準じた書式の A4 2 枚程度の原稿を想定しています。
- 2) 文字数・図表等は過大なスペースを取らないよう、ご配慮ください。
- 3) 原稿は上 20mm、下 20 mm、左右 20mm の余白をとる。
- 4) 表題・発表者名・共同研究者名・所属施設名を記入してください。

## 5. お問い合わせ先

メールアドレス：takafumimatsuba@gmail.com（松葉敬文）

(作成例) 表題 (文字サイズは 14 ポイント)

20mm

双生児 花子<sup>1</sup>・双生児 太郎<sup>2</sup> (文字サイズは 10.5 ポイント)

<sup>1</sup>△△△大学・<sup>2</sup>〇〇〇会 (文字サイズは 9 ポイント)

(一行あける)

※本文はここから記入

用紙は、上下 20mm、左右 20mm の余白をとる。

本文の文字サイズは 10.5 ポイント

和文フォントは明朝体で全角、英文およびアラビア数字は半角 としてください。

可能であれば I 目的・II 方法・III 結果・IV 考察・V 結論別にまとめてください。ただし、I～V のような項目分けが難しければ、それ以外でも可。

20mm

カラー印刷は不可とします。

20mm

## <総会・幹事会報告>

### 日本双生児研究学会 2021 年第 1 回幹事会 議事録

2021 年 1 月 23 日 Web 開催

(出席者)

幹事：安藤寿康、糸井川誠子、加藤則子、志村恵（会長）、菅原ますみ、広瀬英子、  
福島昌子、布施晴美、横山美江、渡邊幹夫 計 10 名

監事：前川浩子 計 1 名

オブザーバー：松葉敬文（次期学術講演会長） 陪席：学会事務局（赤田）

#### 1. 2020 年度事業・会計報告、監査報告（資料 1）

資料に基づき報告があり、承認された。また監事より監査報告があり承認された。

#### 2. 2021 年度事業案・予算案（資料 2）

資料に基づき提案があり、原案通り承認された。

今後の COVID-19 の状況により流動的な執行となることについても合意された。

#### 3. 監事の選出について

前川監事の後任として、落合世津子先生、松葉敬文先生が監事として選出された。任期は現幹事の残任期（2022 年まで）と一致させることとなった。

#### 4. 2023 年 1 月の学術大会の候補地・大会長について

就実大学の鈴木国威先生に内諾問い合わせ中であり、内諾されれば決定とする。

#### 5. 学会誌について

2022 年から具体的な事業とする計画で、WG を立ち上げることにした。WG メンバーは一般会員も含めて会長が指名することとした。

#### 6. 2022 年 1 月の学術大会（大会長：岐阜聖徳学園大学松葉敬文先生）の確認

松葉先生より準備状況が報告された。

2022 年 1 月 22 日（土）ウィンクあいち（名古屋駅前）を会場としてハイブリッド開催が検討されている。海外からの講演を含めて準備中。査読セッション設置や **Proceeding** の発行も計画しており、**Proceeding** は学会誌の特別号とすることも検討することとした。

#### 7. 奨励賞の連絡方法について

奨励賞は選考委員会から幹事会へ報告の上審議し、受賞者へは会長より伝達することを確認した。

#### 8. 研究会の開催について

安藤先生より、コロナ禍での多胎の子育て状況調査についてのさらなる報告をテーマとしてウェビナー型式等で実施する案が提案され、さらに幹事会でもその他の提案も行っていくことを含めて了承された。

## 事業報告

1. 第34回学術講演会の開催（報告：志村会長）  
2020年1月11日（土）石川県政記念しいのき迎賓館にて開催。参加者61名。
2. ニュースレターの発行（報告：広瀬・福島編集委員）  
第68号（7月）、第69号（12月）（第69号については郵送のみ2021年会計で執行）
3. 会員状況報告（報告：渡邊）  
2020年12月末現在 会員数115名（2020年会費納入者55名）  
2020年新規入会者7名、名誉会員8名、3年以上未納者4名、2020年退会者4名
4. 研究会について（報告：志村会長）  
実施しなかった
5. メーリングリスト（ML）について（報告：渡邊）  
会員用ML登録率：全会員の77%（88名）  
※未登録者の登録は、学会HPの「問い合わせ」フォームより受付。

## 日本双生児研究学会 令和2年(2020.1.1～2020.12.31)会計収支報告

収入		支出	
前年繰越	1,144,356	ニュースレター印刷費(68、69号)	23,325
		ニュースレター郵送費(68号)	15,840
会費収入		ニュースレター編集代(令和2年分)	30,440
平成30年度年会費(4)	12,000	幹事会費用	17,701
令和元年度年会費(16)	48,000	ホームページ関連費	34,615
令和2年度年会費(55)	165,000	事務局人件費	60,000
令和3年度年会費(1)	3,000	通信費	1,954
		幹事選挙関連費(消耗品費含)	4,676
寄付金	3,000		
利子	10		
		次年繰越金	1,186,815
収入合計	1,375,366	支出合計	188,551

## 2021年度事業案

1. 第35回学術講演会の開催（安藤会長）  
2021年1月23日（土）Web開催
2. ニュースレターの発行（広瀬・福島編集委員）  
第70号（7月）、第71号（12月）
3. 研究会について（志村会長）  
（本日の幹事会で検討）
4. メーリングリスト（ML）運用（渡邊）  
※未登録者の登録は、学会HPの「問い合わせ」フォームより受付。

日本双生児研究学会 令和3年(2021.1.1～2021.12.31)会計予算案

収入		支出	
前年繰越 (令和3年分納入者1名含む) 会費収入	1,186,815	ニュースレター印刷費(70,71号)	100,000
		ニュースレター郵送費(69,70,71号)	50,000
		ニュースレター編集費(R3年)	30,000
		研究会講演者謝金	20,000
75人(115*0.65)*¥3,000	224,250	研究会講演者交通費	30,000
過年度会費20人*¥3,000	60,000	研究会会場使用費	5,000
		学術講演会援助費	100,000
利子	10	会議費(幹事会)	10,000
		奨励賞関連費	55,000
		ホームページ関連費	35,000
		事務局人件費(5,000/月)	60,000
		消耗品費	5,000
		次年繰越金	971,075
収入合計	1,471,075	支出合計	500,000

## 日本双生児研究学会 2021年 総会議事録

2021年1月23日 Web開催

【報告・審議内容】幹事会議事録に準ずる。

## 日本双生児研究学会 2021年第2回幹事会 議事録

日時：2021年7月17日(土)10:30～ Web開催

出席(敬称略)

志村・安藤・早川・菅原・加藤・糸井川・横山・布施・福島・廣瀬・渡邊・松葉(オブザーバー)

### 審議事項

#### 1. 学会誌について

志村会長より、学会誌創設について検討WGで作成した原案が説明され、審議の結果、以下のとおり承認した。

- ・学会誌創設について最終的には来年の総会に諮ることとした。
- ・編集方針について原案通りとした
- ・編集委員会が事務的作業を行い、事務局は論文の公表や投稿規定等にかかる Web 掲載作業を行うこととした。
- ・最初の編集委員会は WG メンバーがそのまま就任することとした。

#### 2. 奨励賞について

横山幹事より次号ニュースレターに周知し公募予定とすることが提案され、承認された。

#### 3. 2021年度研究会について

安藤幹事より演者やテーマについての推薦を幹事会に依頼する提案があり、承認された。

#### 4. 学会としての要望について

横山幹事より厚労省等への要望を学会として行う可能性について問題提起があり、今後前向きに検討する予定とした。

#### 報告事項

##### 1. 2022年1月学術講演会の進捗状況

松葉会長より二会場かつハイブリッドでの開催予定であり、ニュースレターで一般演題の公募予定であること、現時点での内容は以下の予定であることが報告された。

<査読セッション；招待>

Prof.Nancy Segal (UC Fullerton)

Prof. Enrico Lopriore(Leiden Univ.)

Dr. Jeanine van Klink(Leiden Univ.)

新田絵美子（香川大学医学部）

（未定）Roberta Blake(QIMR Berghofer Medical Research Institute)

<教育セッション;招待>

Monica Rankin (ICOMBO)

Stephanie Ernst (TAPS Foundation)

David Becker (Chemnitz University of Technology)

※ICOMBO 所属のアフリカの支援団体に活動報告を依頼中

##### 2. ニュースレターについて

廣瀬幹事より、進捗状況について、8月の発送を予定して編集作業中であることが報告された。

### <日本双生児研究学会ジャーナルの創設について>

7月17日に行われた幹事会において、懸案だった学会誌の創刊が認められました。正式の決定は、来年1月の学術講演会の際に開催される総会の議を待たなくてはなりません。準備を進め、今年度中の発行を目指します。

学会誌は、査読付きの電子ジャーナル(オープンアクセス)とし、『双生児研究』(Japanese Journal of Twin Studies)と称する予定です。投稿は、電子ジャーナルの利点を生かし、随時としたいと思っておりますので、今から準備いただければと思います。投稿規定等詳しくは、今後HPやNLで周知していきたいと思っております。この電子ジャーナルの創刊が、本学会のさらなる活性化に資すればと願っています。(学会長 志村 恵)

## <2021 年度日本双生児研究学会奨励賞授賞候補者推薦方法について>

2021 年度日本双生児研究学会奨励賞授賞候補者がありましたら、2021 年 9 月末日までに御推薦ください。

### 日本双生児研究学会 奨励賞規程

第 1 条 日本双生児研究学会奨励賞候補者（以下候補者）の推薦基準は、以下の要件を満たした者とする。

2. 本学会会員のうち、我が国の双生児研究の領域における学問水準の飛躍的向上を図ることに貢献することが期待される者。
3. 双生児研究に関する独創的研究で、かつ将来の発展を期待しうる研究業績を有する者、研究業績は、国内外の学術雑誌に掲載されているものとする（受理されていても未公開のものは含めない）。
4. 日本双生児研究学会の会員で、原則として 50 歳未満である者。

第 2 条 候補者の推薦は、原則として幹事が推薦し、推薦できる人数は 1 年につき 1 名とするが、自薦も可とする。

2. 推薦者（自薦の場合は立候補者）は、候補者に関する下記の書類（論文別刷以外の書類は A4 版の大きさの用紙に横書きに記載したものとする）各 4 部を 9 月末日までに日本双生児研究会事務局に提出する。
  - 1) 候補者の氏名、所属、所属先住所、略歴、関連論文目録
  - 2) 業績の概要（A4 版用紙 1 枚程度におさめること）
  - 3) 選考対象となる研究業績に係わる論文の別刷

第 3 条 奨励賞は、下記の要領により決定する。

2. 候補者の選考は、推薦基準により選考委員会が行う。
3. 選考委員会の構成は、幹事 4 名とする。なお、推薦者および立候補者となった幹事は選考委員になることはできない。
4. 選考委員長は選考委員の互選とする。
5. 選考委員長は、選考結果を幹事会に報告し、11 月末日までに承認を得て受賞者を決定する。

第 4 条 受賞者は、受賞年度の日本双生児研究学会総会において、会長より賞状と副賞が授与され、受賞記念講演をおこなうこととする。

第 5 条 奨励賞に関する事務局は、日本双生児研究会事務局とする。

### 附則

この規程は、令和 2 年 1 月 12 日から施行する。

## <日本双生児研究学会 会員用メーリングリストについて>

当学会事業のお知らせと、会員間の情報交換や交流にもご活用いただきたく、2017年度より会員用新メーリングリスト ([jstsm1@googlegroups.com](mailto:jstsm1@googlegroups.com) 以下 ML) を運用し、2020年1月現在で約8割の方にご登録いただいております。ご協力をありがとうございました。

登録がお済みでない方は、下記の手順に従いご登録くださいますようお願いいたします。

### ◎現会員の登録について

学会 HP の【お問い合わせフォーム】 (<https://jsts.jp.net/contact/>) から、「区分」は「その他」を選び、「お問い合わせ内容」に「ML 登録希望」として、①お名前、②メールアドレス、③所属等の3点をお知らせください。追って担当者より「ML 登録完了」のご連絡をいたします。

### ◎新入会員の登録について

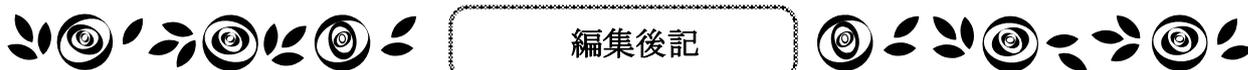
新入会員については、「ML 非登録」のお申し出がない限り入会申込と共に ML に登録しますので、連絡は不要です。ご入会后に担当者より「ML 登録完了」のご連絡をいたします。

### ◎配信の停止・変更

配信の一時停止・再開やメールアドレスの変更などについても、上記【お問い合わせフォーム】からお知らせください。

### ◎利用上の注意

- ・ ML での発信・返信は、「送信者名」、「アドレス」、「本文」が ML 登録会員全体で共有されます。特に返信の場合はご注意ください。
- ・ 添付ファイルを制限していませんので、コンピュータウィルスに対しては各自で防衛してください。
- ・ [jstsm1@googlegroups.com](mailto:jstsm1@googlegroups.com) からのメールを受信できるように設定していただければ、携帯アドレスでの登録も可能ですが、添付ファイルの容量制限等もありますので、PC アドレスでの登録をお勧めします。
- ・ 大学や職場のドメインを含むアドレスの場合、ウェブ投稿機能がドメイン管理者により無効にされていることがあります。ご自身の投稿が反映されない場合には、ドメイン管理者にご確認の上、別アドレスへの変更等をご検討ください。



みなさまはお元気にお過ごしでしょうか。この70号では、第35回学術講演会のご報告と、2022年1月の第36回学術講演会のご案内を中心に編集いたしました。多数ご参加いただけますと幸いです。これまでの会員のみなさまのご協力に感謝するとともに、今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

編集委員： 廣瀬英子（上智大学）・福島昌子（福井大学大学院）